青森市埋蔵文化財調査報告書　第76集

栄山(3)遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書　第76集

栄 山 (3) 遺 跡

発掘調査報告書

平成 16 年度

青 森 市 教 育 委 員 会

正誤表

頁	行	誤	正
序	1行目	306ヶ所	307ヶ所
5頁	7行目	深さ35cm	深さ49cm
5頁	23行目	深さ45cm	深さ15cm
15頁	第10図	2 SK-05	2 SK-03
20頁	写真3	第9図7	第10図3

序

青森市内には平成16年２月28日現在で306ヶ所の遺跡が所在しており、これまで公共事業や民間開発事業等に伴う発掘調査が数多く実施されてきております。

栄山(３)遺跡は、平成11年度に東北縦貫自動車道建設に伴い青森県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査がなされ、本年度には本書の三協運輸株式会社の水路付け替工事に伴う発掘調査、また国庫補助事業での個人による進入路造成に伴う発掘調査が実施されております。

本遺跡は、この度の発掘調査や県埋蔵文化財調査センターの発掘調査成果により、縄文前期から縄文後期まで断続的に使用され、平安時代には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などから構成される集落が営まれていたことが明らかとなりました。

本書が今後の埋蔵文化財の保護並びに活用に役立つことができれば幸いと存じます。

最後に本書を刊行するにあたり調査委託者であります三協運輸株式会社をはじめ、関係諸機関および関係各位のご理解・ご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

青森市教育委員会

教育長　**角　田　詮　二　郎**

例　　言

１．本書は、青森市大字細越字栄山に所在する栄山(３)遺跡の発掘調査報告書である。

２．本遺跡の一部は、東北縦貫自動車道八戸線建設事業に先立ち、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査が実施され、本年度は当委員会により民間会社および個人による造成工事に伴う発掘調査が実施されている。

３．本年度の発掘調査に際しては、民間開発に伴う事業者経費負担区域を便宜上「原因者負担区」、個人開発に伴う調査区を「国庫補助事業区」と称して実施した。
本報告書は、原因者負担区の調査成果をまとめたものである。なお、国庫補助事業区の報告書は、本年度刊行の「市内遺跡発掘調査報告書13」青森市埋蔵文化財調査報告書第79集に所収している。

４．今回の発掘調査（原因者負担区）は、水路付替え工事に伴うもので三協運輸株式会社の委託を受け実施した。

５．本報告書の主な執筆及び編集は、青森市埋蔵文化財調査員 一町田 工が担当し、第Ⅰ・Ⅱ章については文化財主事 児玉大成が担当した。

６．石質の鑑定については、青森県総合学校教育センター指導主事 工藤一彌氏に依頼した。

７．本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄1993) に準拠した。

８．挿図の縮尺は各図に示した。また、方位については真北を示した。

９．出土遺物及び記録図面ならびに写真関係等の資料は、現在、青森市教育委員会が保管している。

10．図中、表中で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
土坑→SK-○○、小ピット→SP-○○、焼土遺構→SF-○○、焼土遺構内の土坑→SF○○-sk○○、焼土遺構内の小ピット→SF○○-pit○○、国庫補助事業区の土坑→国補SK-○○

11．発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、調査委託者である三協運輸株式会社をはじめ、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。(敬称略)

文化庁・青森県教育庁文化財保護課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・木村房雄・工藤清泰・工藤　大・白鳥文雄・鈴木克彦・成田滋彦・畠山　昇・三浦圭介・三宅徹也

目　　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　調査方法……2
　第４節　調査経過……3
　第５節　遺跡の環境……3

第Ⅱ章　検出遺構……5
　第１節　土坑……5
　第２節　小ピット……8
　第３節　焼土遺構……10

第Ⅲ章　出土遺物……12
　第１節　縄文土器……12
　第２節　土師器・須恵器……12
　第３節　土製品……12
　第４節　石器……12
　第５節　鉄製品……15

まとめ……17
写真図版……18
報告書抄録、引用・参考文献

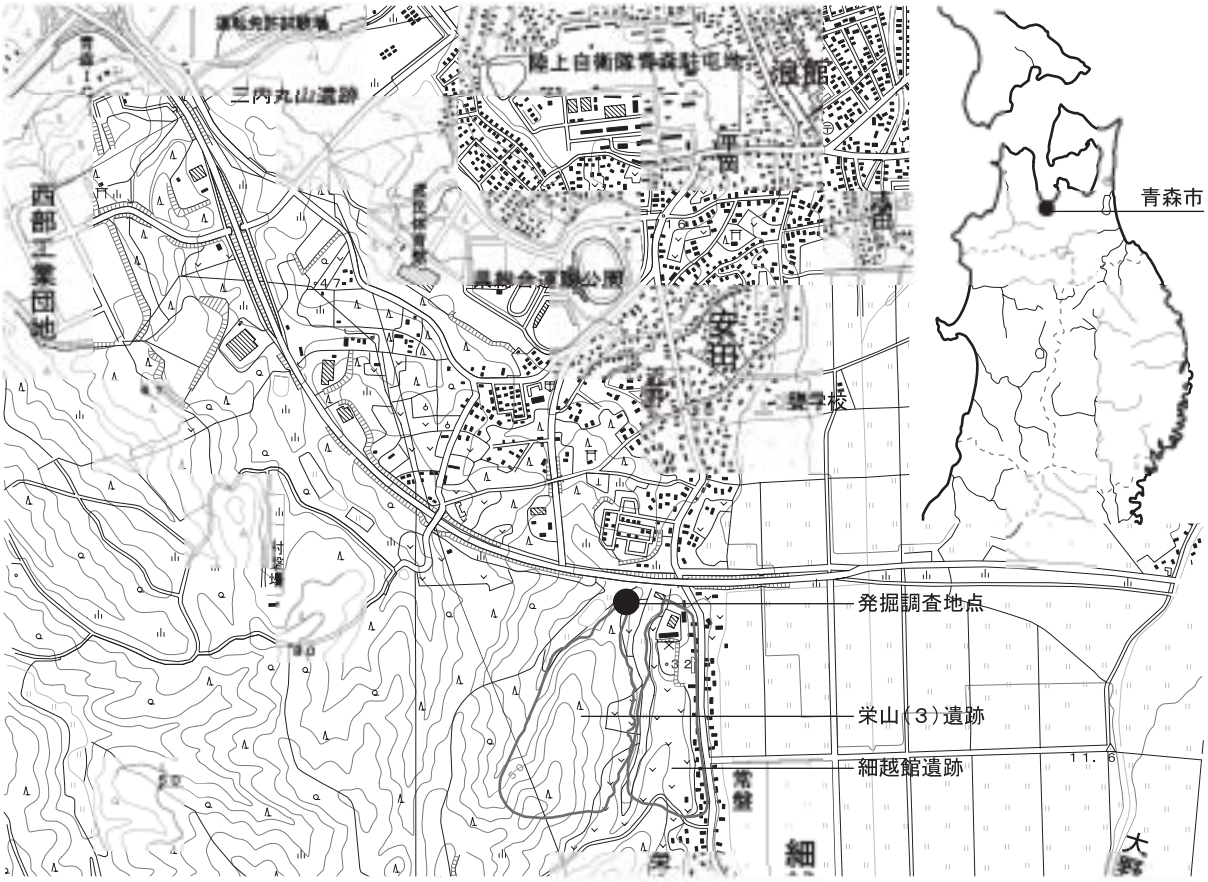
図版目次

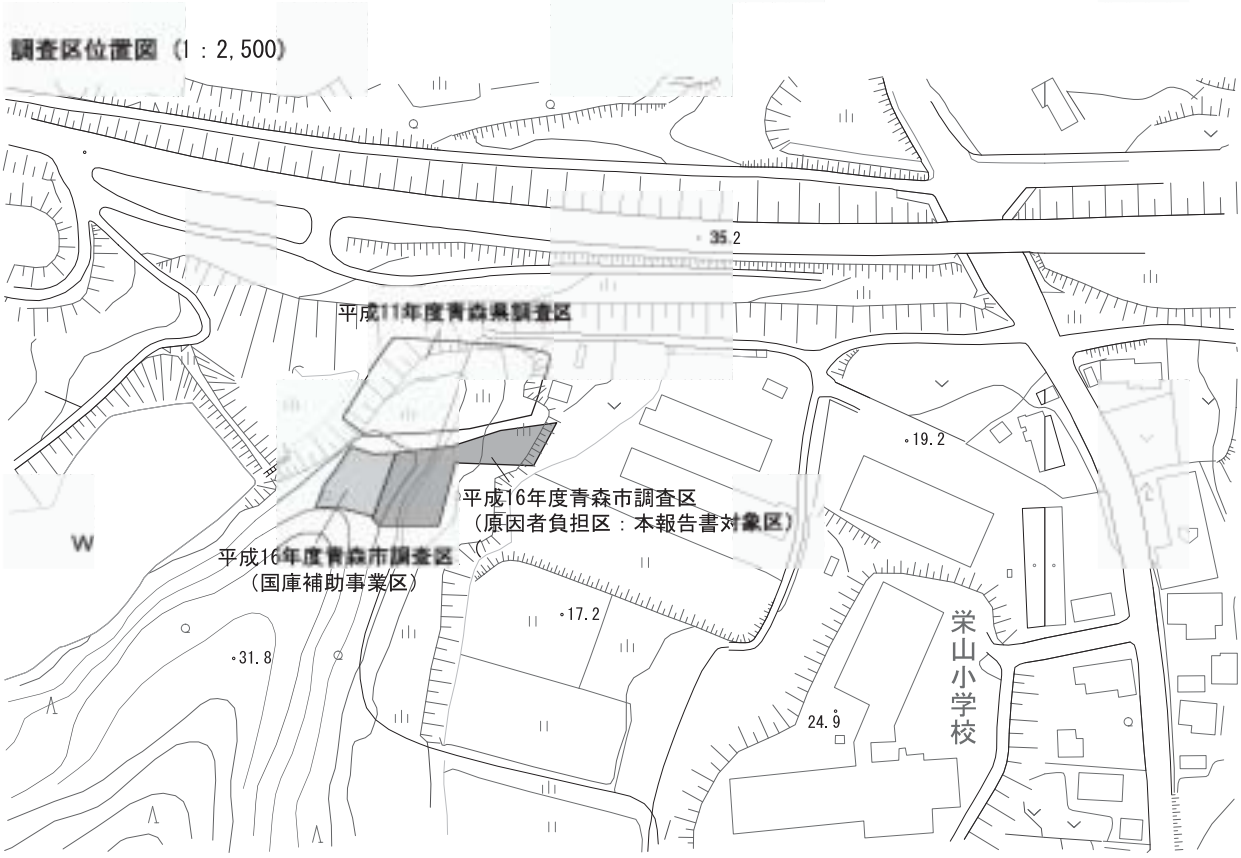
第１図　遺跡の位置および調査区位置図
第２図　グリッド配置図および基本層序 ……3
第３図　遺構配置図 ……4
第４図　土坑（SK-01）……6
第５図　土坑（SK-02～04）……7
第６図　小ピット（SP-01～06）……9
第７図　焼土遺構（SF-01）……11
第８図　縄文土器 ……13
第９図　土師器・須恵器 ……14
第10図　土製品・石器・鉄製品 ……15

表目次

第１表　土坑属性表 ……6
第２表　小ピット属性表 ……8
第３表　焼土遺構属性表 ……10
第４表　出土土器属性表（１）……14
第５表　出土土器属性表（２）……16
第６表　出土土製品属性表 ……16
第７表　出土石器属性表 ……16
第８表　出土鉄製品属性表 ……16

遺跡位置図（1：25,000）





第１図　遺跡及び調査区位置図

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成16年３月12日、青森市教育委員会文化財課（以下、当委員会）に青森市細越字栄山の駐車場造成に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」が三協運輸株式会社より提出された。埋蔵文化財包蔵地の位置関係を照合した結果、開発予定地が細越館遺跡（青森県遺跡台帳番号066）および栄山(３)遺跡（青森県遺跡台帳番号213）に該当していることが明らかとなった。

また、平成16年度になり同計画地における不動産取引に鑑み、青森市建築指導課より土地売買等届出書（国土利用計画法第23条第１項に基づく）に対する意見照会を売買取引地ごとに何度か求められた。その間、開発計画と埋蔵文化財の取扱いについて三協運輸と協議し、平成16年５月20日に発掘調査の要否を目的とした試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定地（16,377㎡）のうち、試掘可能な区域を対象に東側の細越館遺跡40㎡、西側の栄山(３)遺跡25㎡に対し、重機による掘削及び必要に応じて鋤簾がけを行った。試掘調査の結果、細越館遺跡の計画地は既に削平されていたことを確認し、栄山(３)遺跡の計画地では遺構・遺物等は検出されなかったため、前者を慎重工事、後者を工事中の立会いが必要であると三協運輸に回答した。

また、５月下旬には、上述の駐車場用地造成に伴い水路付替え工事用地およびその隣地である個人敷地内の進入路造成地が栄山(３)遺跡に該当していることが明らかとなった。三協運輸は、平成16年６月７日付けで当委員会を経由して県教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する届出書を提出し、６月21日付け青教文第356号にて同県教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。これに前後して当委員会では、三協運輸および個人開発者と協議し平成16年６月11日、６月18日に発掘調査の要否を目的とした試掘調査を実施した。

試掘調査は、両開発予定地（1,229㎡）に任意のトレンチを６地点設定し、重機による掘削及び必要に応じて鋤簾がけを行った。調査面積は209㎡である。

試掘調査の結果、三協運輸側の区域より土坑１基と縄文土器片、個人進入路造成区域より竪穴住居跡１軒や土師器片などを確認したため、三協運輸および個人開発者と協議し、三協運輸側の区域については平成16年７月20日～８月20日の期間で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については三協運輸側の水路付替え工事区域を原因者負担区として、個人進入路造成区域を国庫補助事業区として対応した（第１図下）。

第２節　調査要項

１．調査目的

水路付替え工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うとともに、地域社会の文化財の活用に資する。

２．遺跡名及び所在地

栄山(３)遺跡　　（青森県遺跡番号　０１２１３）

青森市大字細越字栄山659－２外

３．事業実施期間　平成16年７月８日～平成17年３月31日

４．発掘調査期間　平成16年７月20日～平成16年８月20日

５．調査面積　820㎡

６．調査委託者　三協運輸株式会社　代表取締役　木村　英敬

７．調査受託者　青森市

８．調査担当機関　青森市教育委員会事務局文化財課

９．調査指導機関　青森県教育庁文化財保護課

10．予算措置　調査委託者側で措置

11．調査体制　調査事務局　青森市教育委員会

教育長	角田詮二郎	文化財主事	小野　貴之
教育部長	古山　善猛	〃	木村　淳一
教育次長	最上　進	〃	児玉　大成（調整担当）
参事文化財課長事務取扱	遠藤　正夫	〃	設楽　政健
文化財課主幹	多田　弘仁	主事	宮本　大輔（庶務担当）
主査	辻　文子	〃	足澤　愛子（庶務担当）

12．調査担当者　青森市埋蔵文化財調査員　一町田　工

第３節　調査方法

グリッドの設定は、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターの発掘調査で使用していたグリッドを拡張し、調査区内に４ｍ×４ｍのメッシュを組んだ（第２図左）。グリッド杭の表示は、AA-25（X＝88,196.0、Y＝-10,200.0）を起点とし、北へA、B、C…、南へAB、AC、AD…の順にアルファベットを付し、また東へ24、23、22…、西へ26、27、28…の順に算用数字を付した。各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示し、南東角のグリッド杭の名称によるものとした。

調査区域での測量原点は、市立栄山小学校敷地内にある水準点（青2K7　H＝25.072m）より移動を行い、AA-25のグリッド杭に標高26.503mの原点を設置した。これを基準として調査区全域に対処するため適宜数箇所に設置した。

各遺構は、種類別、確認順に遺構番号を付した。遺構精査にあたっては、原則として４分法、２分法を用いることとし、その他必要に応じ土層観察用のベルトを設定した。

遺構の実測図作成においては、平面図、断面図を主体に作成した。実測にあたっては、基本的に簡易遣り方測量で行い、縮尺については、原則として20分の１とし、その他必要に応じ10分の１とした。

写真撮影については、土層断面、完掘状況を主体に撮影し、必要に応じ遺物出土状況を撮影した。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルを併用した。

出土遺物の取り上げに関して遺構内出土遺物は、基本的に出土位置を記録し、堆積土の層位毎に取り上げた。遺構外出土遺物は、原則的にグリッド単位で層位毎に一括して取り上げた。

第４節　調査経過

原因者負担区の発掘調査は、国庫補助事業区と併行して実施することとなった。調査は、平成16年７月20日に着手し、重機による表土除去を行い、公共座標に関連付けたグリッド杭を打設した。また、栄山小学校敷地内の水準点より原点移動を行い調査区内に測量原点を設置した。

その後、発掘調査区を鋤簾がけし、遺構確認面の精査を行った。

遺構確認および精査は、調査終了日の８月20日まで行い、同日中にすべての作業を終了した。

なお、表土除去や排土移動用の重機、グリッド杭の打設、原点移動および発掘調査に関わる作業員等三協運輸の提供によるものである。

第５節　遺跡の環境

本遺跡が所在する青森市は、北の陸奥湾に面する青森平野とこれを取り囲む、東部の山地、南部に広がる火山性台地、西部の丘陵地からなる。本遺跡は、市内西部の丘陵地の北東端付近に位置し、南北に伸びる遺跡の北端を青森県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に東北縦貫自動車建設に伴う発掘調査を実施している。

本発掘調査は、その南側に接する標高17～26m付近の緩斜面に調査区を設定し実施した。

また、本調査区の西側隣地については個人の進入路造成に先立ち国庫補助事業として今回の調査と並行して発掘調査を実施した。

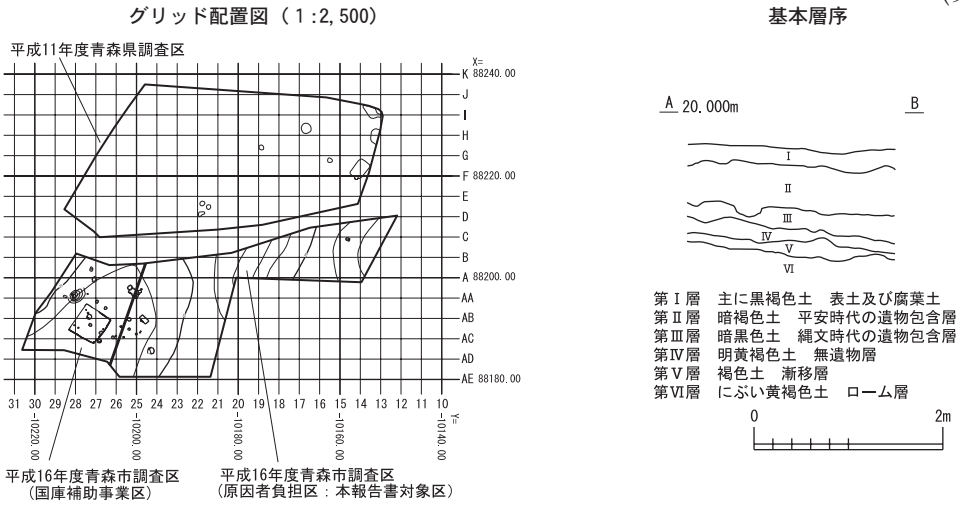
調査前の現状は、かつて行われた黒土の土取り痕が表土上及び試掘調査の段階で広範囲にわたって認められた。

遺跡内の土層（第２図右）は、基本的に６分される層序となっており、第Ⅱ層が平安時代、第Ⅲ層が縄文時代に相当し、第Ⅳ層以下は無遺物層となっている。

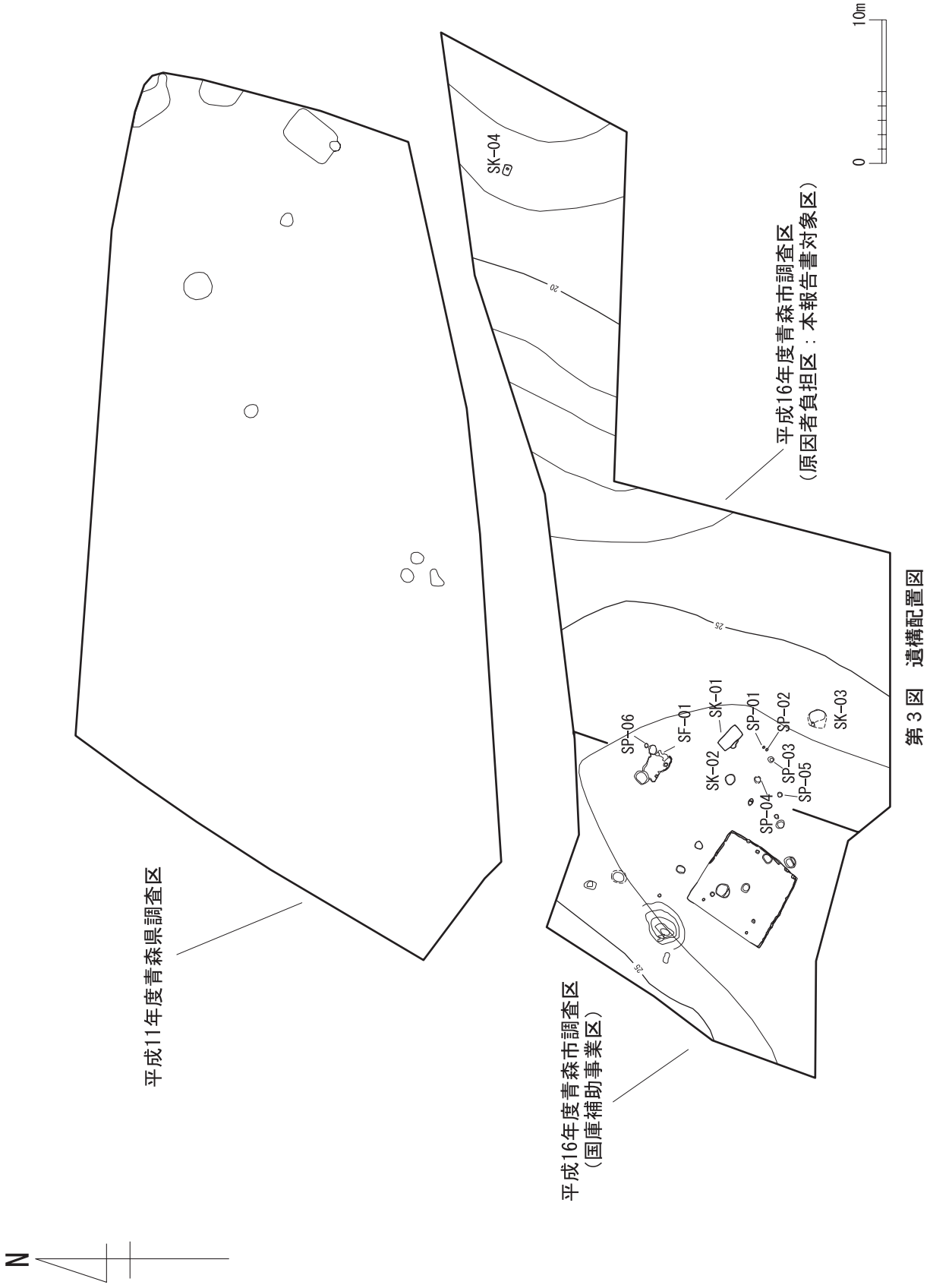
このような基本層序は、市内丘陵地に立地する遺跡では概ね同様の状況で確認されている。

周辺の遺跡については、青森県教育委員会が平成12年度に刊行した報告書『栄山(３)遺跡』に詳述しており、そちらを参照されたい。

（児玉　大成）



第２図　グリッド配置図及び基本層序


平成11年度青森県調査区
平成16年度青森市調査区
（国庫補助事業区）
平成16年度青森市調査区
（原因者負担区：本報告書対象区）
SK-04
SP-06
SF-01
SK-01
SP-01
SP-02
SK-03
SK-02
SP-03
SP-05
SP-04
20
25
25
N
0
10m

第３図　遺構配置図

第Ⅱ章　検出遺構

第１節　土坑

SK-01（第４図）

位　置　AB・AC-24グリッドで確認した。確認面の標高は26.5mである。

平　面　ほぼ楕円形であり重複はない。

断　面　底面は比較的平坦で壁面直立気味に立ち上がっている。ただし南東側の一部が張り出している。

規　模　開口部長軸178㎝、短軸98㎝（張り出し部分を含む短軸は117㎝）、深さ35㎝を計る。西北側壁面には底面から10㎝程上方に12㎝×24㎝の範囲で、壁が被熱して赤色化している部分が認められた（第４図右上）。

堆積土　褐色土・暗褐色土を主体として６層に分層され、全般的に微量もしくは少量の炭化粒を含んでいる。１・２層は自然堆積、３層から６層は人為堆積と思われる。底面直上出土の刀子を覆うように炭の混入範囲が重層的にみられるとともに、焼土層が確認された。なお、２層では縄文土器と土師器が混在し、４層では土師器と須志器を中心に出土している。

遺　物　縄文土器片14点（第８図１～11）、剥片１点、土師器片24点（第９図１～３・５～７）、須恵器１点(第９図４)、刀子１点(第10図７、F-6)等を出土している。

時　期　土師器､須恵器等の特徴から10世紀後半の遺構と思われる。

小　結　本遺構は、形態や遺構内に見られる壁面の被熱等の状況から、何らかの焼成遺構（例えば土師器など）と考えられるが、堆積状況や遺物の出土状況から後に転用された可能性が高い。

SK-02（第５図）

位　置　AB・AC-25グリッドで確認した。確認面の標高は26.6mである。

平　面　ほぼ円形であり重複はない。

断　面　底面は比較的平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。

規　模　開口部径78㎝、深さ45㎝を計る。

堆積土　微量の炭化物及び少量の焼土が混入している。

遺　物　出土遺物なし。

時　期　不明である。

SK－03（第５図）

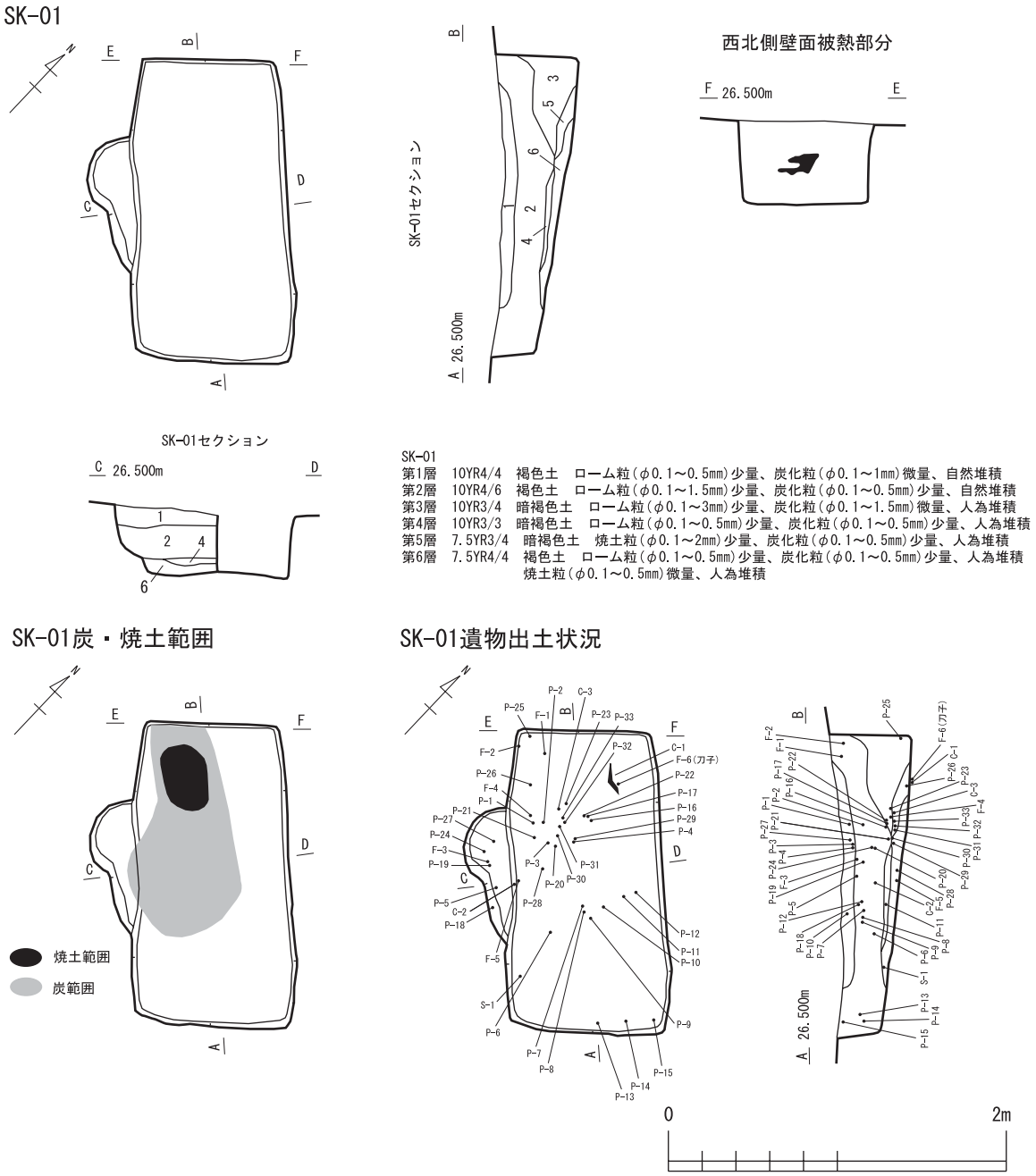
位　置　AD-24グリッドで確認した。確認面の標高は26.2mである。

平　面　ほぼ楕円形であり重複はない。

断　面　底面は比較的平坦である。壁面の南東側は垂直に立ち上がり、西北側は抉られたようにフラスコ状に立ち上がる。

規　模　開口部長軸115㎝、短軸78㎝、坑底部長軸139㎝、短軸130㎝、深さは45㎝を計る。

堆積土　一部撹乱を受けているが自然堆積と思われる。

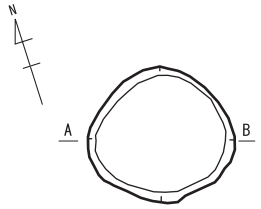


第４図　土坑（SK-01）

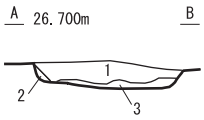
第１表　土坑属性表

遺構番号	位　置	重複	規模（cm）				平面形	断面形	備　　考
			計測部位	長軸	短軸	深さ			
SK-01	AB-24 AC-24	なし	土坑全体	178	98 (117)	49	楕円形	垂直	（　　）は張り出し部分の計測値、炭範囲（4層）範囲（124×65cm)、焼土（5層）範囲（39×27cm)、壁面の焼土範囲（24×12cm)、出土遺物（P-1～P-33・S-1・C1～C3・F-1～F-5)
SK-02	AB-25 AC-25	なし	土坑全体	78	72	15	円形	緩く外傾	
SK-03	AD-24	なし	土坑全体	115 (139)	78 (130)	45	楕円形	東西垂直、南北ﾌﾗｽｺ状	（　　）は坑底部の計測値 P-1～3・S-1～2・F-1
SK-04	D-14	なし	土坑全体	90	54	110	隅丸方形	垂直	
			土坑内小ピット	20	15	24			

SK-02

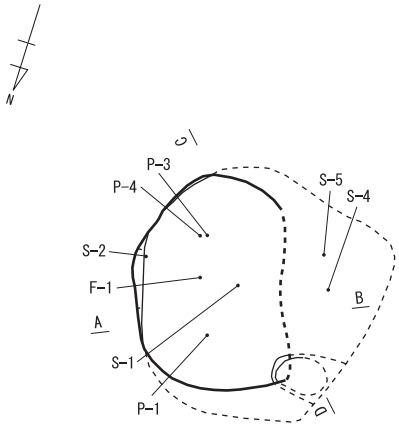


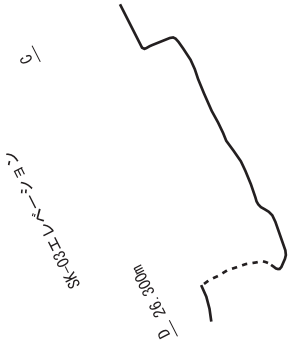
SK-02セクション



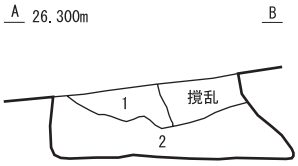
SK-02
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム粒(φ0.1～1.5mm)少量、焼土粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化物微量
第2層　10YR4/6　褐色土　ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～0.3mm)微量
第3層　7.5YR5/8　明褐色土　ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、焼土粒(φ0.1～0.5mm)少量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)微量

SK-03



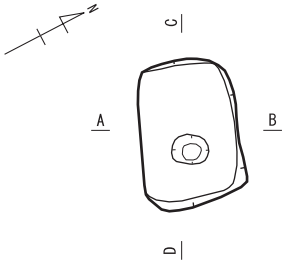


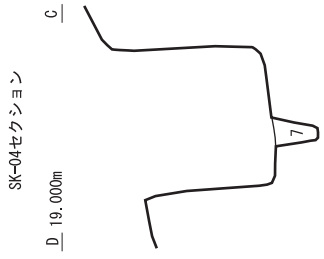
SK-03セクション



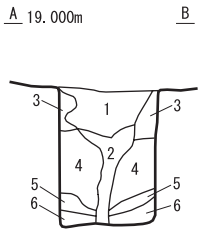
SK-03
第1層　10YR4/6　褐色土　にぶい黄橙色(10YR7/3)ブロック(φ1～2mm)少量、
ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)微量、
焼土粒(φ0.1～0.5mm)微量
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒(φ1～1.5mm)少量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)少量、
焼土粒(φ0.1～1mm)微量

SK-04





SK-04セクション



SK-04
第1層　10YR2/1　黒色土　ローム粒多量、炭化物微少量、しまりあり、粘・湿性あり
第2層　10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック(φ0.5～2cm)中量、ローム粒多量、炭化物粒少量、しまりあり、
粘・湿性あり
第4層　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒多量、炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
第5層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック(φ1～1.5cm)少量、炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
第6層　10YR3/3　暗褐色土　炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
第7層　10YR3/4　暗褐色土　炭化物粒少量、ローム粒中粒、しまりあり、粘・湿性あり

第５図　土坑（SK-02～04）

遺　物　縄文土器片５点（第８図12～16)、石鏃１点（第10図２）が出土している。
時　期　不明である。

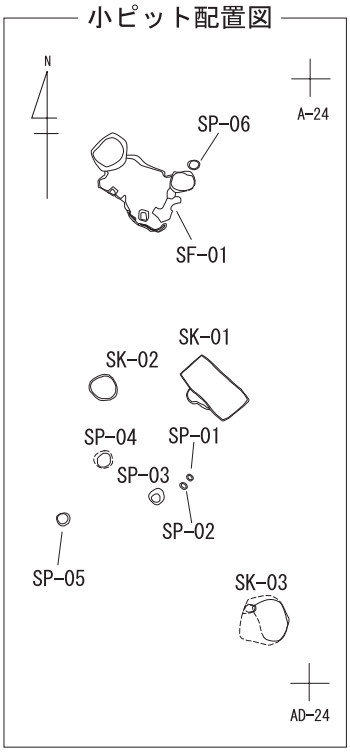
SK－04（第５図)
位　置　D-14グリッドで確認した。舌状に伸びる丘陵の東側斜面に位置し、確認面は標高は18.8mである。
平　面　隅丸方形である。
断　面　底面は比較的平坦で、壁面は垂直に立ち上がっている。底面のほぼ中央に直径20㎝、深さ24㎝ほどの小穴がみられる。底面に打ち込まれた棒杭の痕跡であり、落とし穴状の遺構と考えられる。
規　模　開口部長軸90㎝、短軸54㎝、深さ約110㎝を計る。
堆積土　当初の棒杭が残った状態で自然堆積したものと思われる。
遺　物　出土遺物なし。
時　期　不明である。
関　連　本遺構と同様の落とし穴状の遺構は、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターの調査区より１基検出されている（青森県教育委員会2001a)。

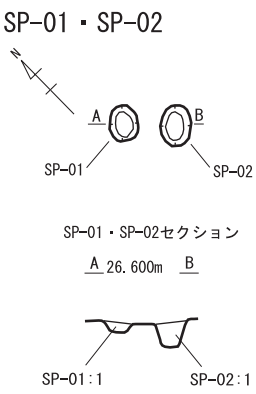
第２節　小ピット

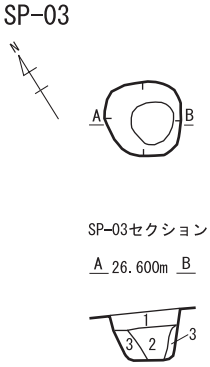
SP-01～SP-06（第６図)
調査の結果、６基の小ピットを検出した。遺構確認面は大部分が撹乱を受けており主に第Ⅳ層～Ⅴ層で遺構を確認した。調査区のAB-25、AC-24～26グリッドの範囲に分布している。周辺に位置するSK-01との関連性は考えにくく、明確な配列を確定できるものもない。遺物が出土しているのはSP-04のみで、縄文時代後期の土器片利用土製品１点（１層、第10図１）出土しているが、遺構の時期を決定するには不十分である。
ここでは、個々のピットについての詳述は割愛し、配置図、実測図、属性表等の掲載にとどめる。

第２表　小ピット属性表

遺構番号	位　置	重複	規模（cm）			平面形	断面形	備　　考
			長軸	短軸	深さ			
SP-01	AC-24	なし	19	15	6	円形	上部傾斜	
SP-02	AC-24	なし	21	17	14	円形	上部傾斜	
SP-03	AC-24 AC-25	なし	40	40	26	円形	垂直	
SP-04	AC-26	なし	40（52）	35（49）	35	円形	フラスコ状	規模の（　　）は坑底部の計測値
SP-05	AC-26	なし	37	34	41	円形	垂直	
SP-06	AB-25	なし	31	26	32	円形	垂直	



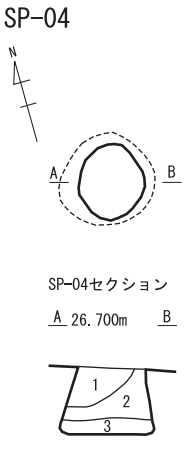


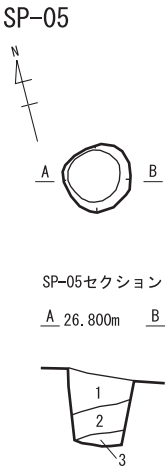


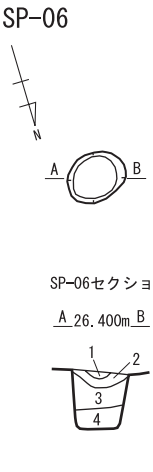
SP-01
第1層　暗褐色土　10YR3/4　炭化物(φ2～3mm)微量、褐色ロームブロック、全体の50%を占める

SP-02
第1層　暗褐色土　10YR3/4　炭化物(φ2～3mm)微量、褐色ロームブロック、全体の50%を占める

SP-03
第1層　褐色土　10YR4/6　焼土(φ5～7mm)微量、炭化物粒(φ2～5mm)極微量
　　褐色土ロームがほぼ全体を占める
第2層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　焼土粒(φ2～3mm)極微量、炭化物粒(φ2～3mm)極微量
第3層　にぶい黄褐色土　10YR5/4　焼土粒(φ2～3mm)極微量、炭化物粒(φ2～3mm)極微量
　　褐色土ロームブロック(φ10～20mm)中量







SP-04
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)微量
第2層　10YR4/6　褐色土　ローム粒(φ0.1～1.0mm)微量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)微量
第3層　10YR4/6　褐色土　粘土質、ローム粒(φ0.1～1.0mm)微量、炭化粒(φ0.1～1mm)微量

SP-05
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～0.5mm)微量
第2層　10YR4/6　褐色土　ローム粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～1mm)少量
第3層　10YR5/6　黄褐色土　ローム焼土粒(φ0.1～0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1～1mm)微量

SP-06
第1層　10YR3/3暗褐色土　炭化物粒(φ0.5mm程のロームブロック)少量、しまりあり、粘・湿性なし
第2層　10YR4/6褐色土　炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりややあり、粘・湿性あり
第3層　10YR4/3にぶい黄褐色土　炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
第4層　10YR4/6褐色土　炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり

第6図　小ピット（SP-01～06）

第３節　焼土遺構

SF-01（第７図）

位置・確認　AA-25・AB-25グリッドに位置する。遺構確認面は、大部分が撹乱を受けており第Ⅴ層上面で本遺構確認した。国庫補助事業区SK-07土坑と重複しているが、本遺構の方が古いものである。

平面・断面　不整長方形を呈しており、底面は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また本遺構の南西部分の焼土や、SF01-sk01を含め、一体として使用されたのではないかと思われる。

規　模　長軸226㎝、短軸160㎝を計る。不整形の焼土は79㎝×52㎝を計り、その長軸西側には炭化粒や、焼土粒を含む層が広がっている。さらにその焼土北側に、sk01とした69㎝×56㎝の楕円形の土坑を検出し、西側の若干離れた壁際にピット２基を検出した。pit１は28㎝×26㎝の長方形、pit２は20㎝×20㎝のほぼ方形を呈する。

堆積土　焼土は４層（１・３・４・５層）に分層した。各層とも全般に炭化粒と焼土粒を含んでいる。特に、１層、３層は炭化粒と焼土粒が多量に混入している。

遺　物　本遺構のほぼ中央上面からは土師器甕胴部片１点、また、pit１付近から石棒１点（第10図３）、さらに、pit２付近から土師器甕胴部片２点が出土している。焼土とsk01土坑の間から須恵器片１点（五所川原須恵器窯跡前田野目支群）が出土している（P3、第９図９）。この須恵器は、長頸壷と考えられ、ナデ調整された肩部から胴部にかけての破片である。sk01の南壁側付近からは須恵器を模倣した黒色処理の小形壷土師器（第９図８）が出土している（P４・P５）。また、焼土から礫の焼け石片２点が出土している。

覆土からは土師器甕片７点が出土し、うち１点は口縁部が外反し、ロクロ調整した後に外面胴部はケズリ、内面胴部は横ナデ調整されており（第９図10)、他は胴部細片である。そのほか第９図８と類似した黒色処理の小形壷土師器片が４点出土している。同じく覆土からは５～８㎝の礫焼け石３点が出土している。

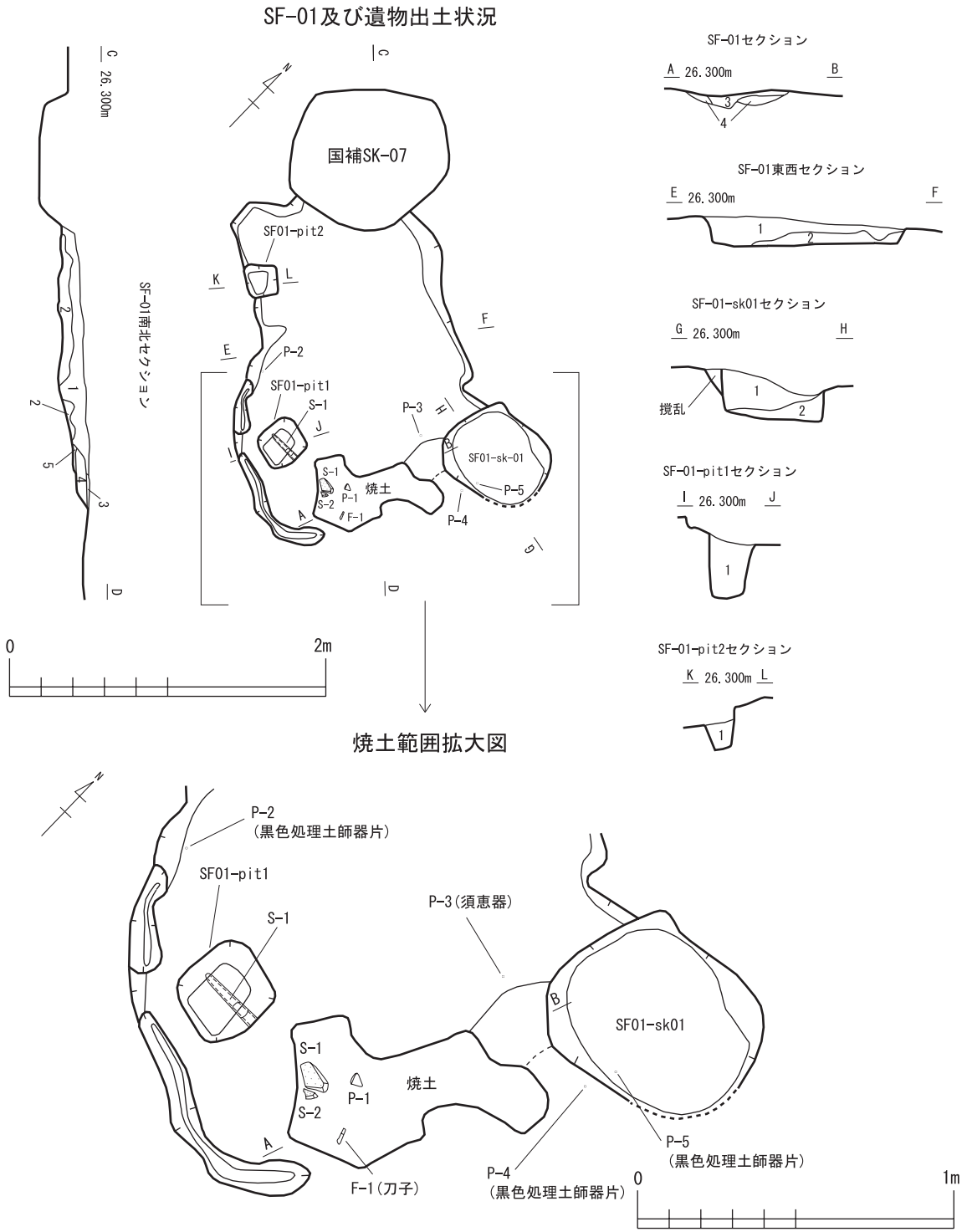
遺構上面からは 刀身部分（F-1）が５分の１程度残存した刀子が出土している（第10図８）。

時　期　本遺構の出土遺物や重複している国庫補助事業区のSK-07出土遺物等の関係から10世紀後半のものと考えられる。

（一町田　工）

第３表　焼土遺構属性表

遺構番号	位　置	重複	規模（cm）				平面形	断面形	備　考
			計測部位	長軸	短軸	深さ			
SF-01	AA-25 AB-25	SF-01> 国補SK-07	焼土遺構全体	226	160	19	不整長方形状	垂直に立ち上がる	出土遺物（P-2～P-5)、焼土範囲（79×52cm）の出土遺物（P-1・S-1,S-2,F-1)
			焼土遺構内sk-01	69	56	34	楕円形	垂直	
			焼土遺構内Pit1	28	26	52	隅丸方形	垂直	出土遺物（S-1)
			焼土遺構内Pit2	20	20	26	隅丸方形	上部斜頚	



SF-01
第1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物(φ5～20㎜)多量、焼土粒少量、ロームブロック(φ2～15cm)中量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
第2層　10YR4/4　褐色土　炭化物(φ2～5㎜)少量、焼土粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
第3層　7.5YR3/4　暗褐色土　炭化物粒中量、焼土粒(2.5YR4/6赤褐色土)中量、しまりあり、粘・湿性なし
第4層　2.5YR4/6　赤褐色土　炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
第5層　7.5YR4/6　褐色土　炭化物粒少量、焼土粒少量、しまりかなりあり、粘・湿性なし

SF01-sk01
第1層　10YR5/6　黄褐色土　炭化物粒少量、ロームブロック(φ4～5cm)中量、焼土粒微量、しまりあり、粘・湿性あり
第2層　10YR4/4　褐色土　炭化物粒少量、ロームブロック(φ5～10cm)少量、しまりややあり、粘・湿性あり

SF01-pit1・pit2
第1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　しまりあり、粘・湿性なし、焼土ブロック(φ0.5～2cm)中量、ロームブロック(φ0.5～1cm)中量、焼土ブロック(φ5～6cm)少量

第７図　焼土遺構（SF-01）

第Ⅲ章　出土遺物

本調査で出土した遺物は、土器、石器等合わせてダンボール約２箱分である。

第１節　縄文土器（第８図）

１．縄文時代前期の土器

Ａ．円筒下層ｂ式に相当する口縁部土器片（第８図17）

平口縁で地文としてＬＲ縄文を施文し、その上に口縁と平行して二条の撚糸圧痕のある土器である。

Ｂ．円筒下層ｄ１式に相当する口縁部土器片（第８図18）

口頸部文様帯は2.5㎝と狭い。口縁と平行・垂直に撚糸を押圧し、胴部にはＲＬの斜縄文を施した土器である。

２．縄文時代中期の土器

Ａ．円筒上層a式に相当する口縁部土器片（第８図19）

太い粘土紐を貼り付け、その上にＬＲの撚糸圧痕のある土器である。

Ｂ．中の平３式に相当する口縁部土器片（第８図20）

平口縁で地文にＬＲ縄文を施したものと、口縁が波状で地文ＲＬ縄文を施した土器である。

３．縄文時代後期初頭の土器

十腰内Ⅰ式土器直前の土器に相当する口縁部土器片（第８図21～35）

文様が磨消縄文・沈線と地文が縄文の土器や、沈線・貼付文・磨消縄文等で、沈線文様を多く施文している土器片などである。

第２節　土師器・須恵器（第９図）

SK-01を中心に土師器甕片が若干出土し、須恵器甕片は数点のみである。土師器甕片では口縁が［く］の字状に外反し、頸部から上は輪積成形のものが多く、ロクロ成形したものもあるが、口縁部を短くつまみ出し、外面に段を有しているものも見られた。

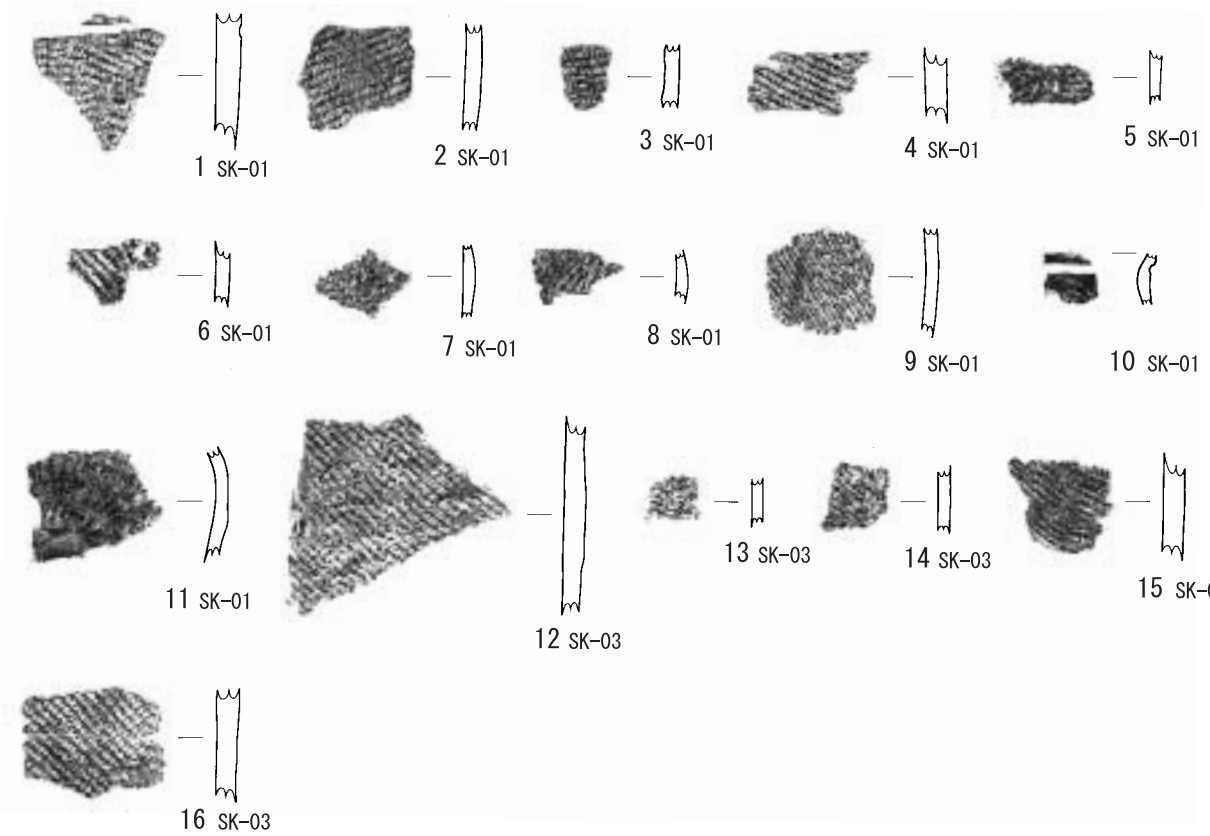
須恵器では甕片が出土し、坏片はなく、須恵器を模倣した黒色処理の小形壷土師器片がみられるなど、須恵器生産の終末期の様相を呈する10世紀後半のものと思われる。

第３節　土製品（第10図１）

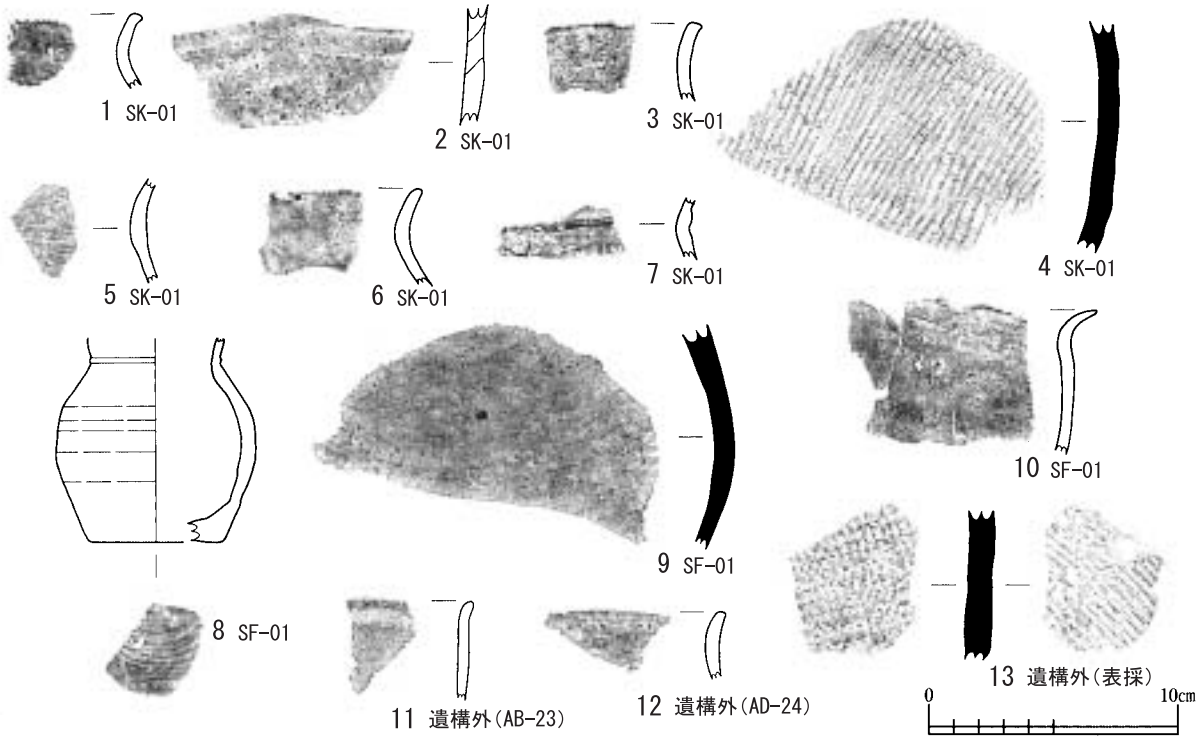
SP-04の覆土から土器片利用土製品（円形）１点出土している。縄文時代後期の土器片を利用したものである。

第４節　石器（第10図２～６）

石器は５点出土し、遺構に伴うものとしてはSK-03出土のより石鏃１点（２）とSF-01出土の石棒１点（３）の２点である。遺構外では、敲石１点（６）、砥石１点（５）、石棒１点（４）、剥片26点が出土している。


1 SK-01
2 SK-01
3 SK-01
4 SK-01
5 SK-01
6 SK-01
7 SK-01
8 SK-01
9 SK-01
10 SK-01
11 SK-01
12 SK-03
13 SK-03
14 SK-03
15 SK-03
16 SK-03
17 遺構外(D-15)
18 遺構外(E-16)
19 遺構外(A-21)
20 遺構外(AB-21)
21 遺構外(AB-24)
22 遺構外(D-15)
23 遺構外(A-19)
24 遺構外(A-21)
25 遺構外(AD-22)
26 遺構外(AE-16)
27 遺構外(AC-25)
28 遺構外(C-15)
29 遺構外(C-15)
30 遺構外(AB-24)
31 遺構外(AB-23)
32 遺構外(A-24)
33 遺構外(A-24)
34 遺構外(A-21)
35 遺構外
0
10cm

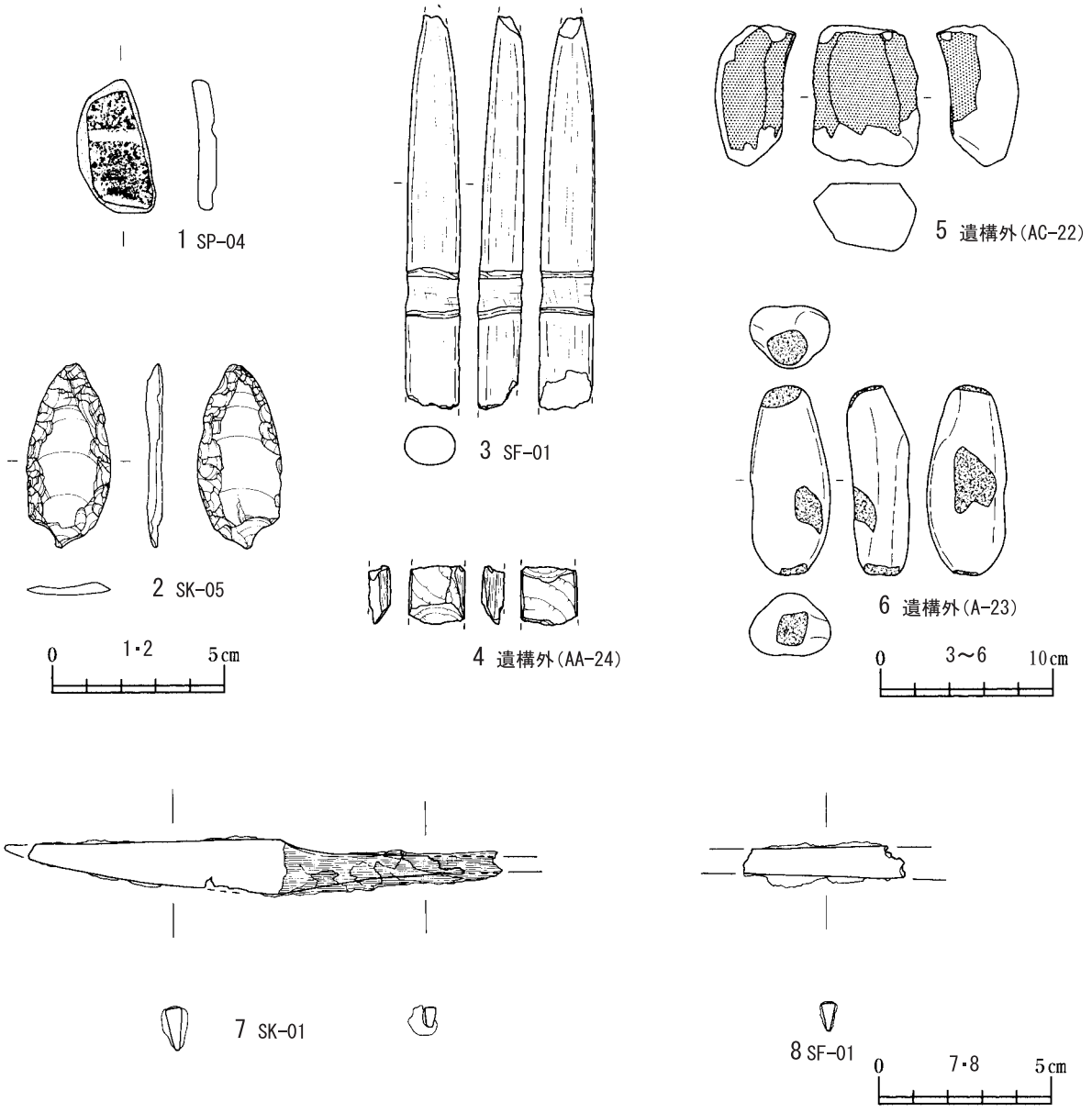
第８図　縄文土器



第９図　土師器・須恵器

第４表　出土土器属性表（１）

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種　別	器種・部位	文　様	内面調整	焼成	備　考
第8図1	SK-01	P-1　(第4図)	2	縄文土器	深鉢・胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
第8図2	〃	P-2　(　〃　)	2	縄文土器	深鉢・胴部	単節LR	ナデ	良	炭化物付着・中期末葉
第8図3	〃	P-3　(　〃　)	2	縄文土器	深鉢・胴部	単節LR	ナデ	良	中期末葉
第8図4	〃	P-4　(　〃　)	2	縄文土器	深鉢・胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
第8図5	〃	P-7　(　〃　)	2	縄文土器	深鉢・胴部	単節LR	ナデ	良	炭化物付着・中期末葉
第8図6	〃	P-10　(　〃　)	2	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
写真3 非1	〃	P-12　(　〃　)	2	縄文土器	底部	－	－	良	－
第8図7	〃	P-13　(　〃　)	2	縄文土器	浅鉢・胴部	－	ナデ	良	炭化物付着・中期末葉
第8図8	〃	P-17　(　〃　)	2	縄文土器	浅鉢・胴部	単節LR	ナデ	良	中期末葉
第8図9	〃	P-18　(　〃　)	1	縄文土器	浅鉢・胴部	単節LR	ナデ	良	中期末葉
第8図10	〃	P-20　(　〃　)	2	縄文土器	壷・頸部	沈線	ナデ	良	炭化物付着・中期末葉
第8図11	〃	P-28　(　〃　)	4	縄文土器	壷・胴部	LR	ナデ	やや良	炭化物付着・中期末葉
第9図1	〃	P-5　(　〃　)	2	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	
写真3 非2	〃	P-6　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ハケメ	ハケメ	良	
写真3 非3	〃	P-8　(　〃　)	2	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	良	
写真3 非4	〃	P-9　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ロクロナデ	ナデ	良	
写真3 非5	〃	P-11　(　〃　)	6	土師器	甕・胴部	ヘラケズリ	ナデ	良	
第9図2	〃	P-14　(　〃　)	2	土師器	甕	ロクロナデ	ハケメ	良	巻上げ成形
第9図3	〃	P-15　(　〃　)	2	土師器	壷・口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	
写真3 非6	〃	P-16　(　〃　)	2	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	良	
第9図5	〃	P-19　(　〃　)	2	土師器	頸部	ハケメ	ナデ	良	
写真3 非7	〃	P-21　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ヘラケズリ	ナデ	良	
写真3 非8	〃	P-22　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	
写真3 非9	〃	P-23　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	黒色処理
写真3 非10	〃	P-24　(　〃　)	2	土師器	甕・胴部	ハケメ	ナデ	やや良	
写真3 非11	〃	P-25　(　〃　)	4	土師器	甕・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	炭化物付着
第9図6	〃	P-27　(　〃　)	2	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	やや良	
写真3 非12	〃	P-29　(　〃　)	4	土師器	甕・胴部	ヘラケズリ	ナデ	やや良	
写真3 非13	〃	P-30　(　〃　)	4	土師器	甕・胴部	ヘラケズリ	ナデ	やや良	
第9図7	〃	P-31　(　〃　)	4	土師器	甕・頸部	ロクロナデ	ナデ	やや良	黒色処理
写真3 非14	〃	P-32　(　〃　)	4	土師器	甕・胴部	ヘラケズリ	ナデ	良	
写真3 非15	〃	P-33　(　〃　)	4	土師器	壷・胴部	ロクロナデ	ナデ	良	黒色処理
第9図4	〃	P-26　(　〃　)	4	須恵器	甕・胴部	タタキ	ナデ	やや良	



第10図　土製品・石器・鉄製品

ただし、砥石（５）については平安時代のものと考えられる。

第５節　鉄製品(第10図７・８)

刀子２点が出土している。１点はSK-01底面からほぼ完形に近い状態で出土し、柄の木部の一部も若干残存している（７)。他の１点は焼土SF-01から出土し、５分の１程度残存する刀身部分である（８)。

(一町田　工)

第５表　出土土器属性表（２）

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種　別	器種・部位	文　様	内面調整	焼成	備　考
第8図12	SK-03	P-1　(第5図)	2	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
第8図13	〃	P-2　(　〃　)	〃	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	やや良	中期末葉
第8図14	〃	P-3　(　〃　)	〃	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	やや良	中期末葉
第8図15	〃		覆土	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
第8図16	〃		〃	縄文土器	胴部	単節RL	ナデ	良	中期末葉
第9図8	SF-01	P-4･5(第7図)	1･2	土師器	壷	ロクロナデ	ナデ	良	黒色処理
第9図9	〃	P-3　(　〃　)	1	須恵器	長頸壷	ロクロナデ	ナデ	良	
第9図10	〃	－	覆土	土師器	甕・口縁部	ヘラケズリ	ナデ	良	
第8図17	遺構外(D-15)	－	Ⅱ	縄文土器	深鉢･口縁部	口縁、二条の撚糸圧痕地文ＬＲ	ナデ	良	円筒下層ｂ式
第8図18	遺構外(E-16)	－	〃	縄文土器	深鉢･口縁部	口縁、平行、垂直撚糸圧痕、地文ＲＬ	ナデ	良	円筒下層ｂ式
第8図19	遺構外(AB-22)	－	〃	縄文土器	深鉢･口縁部	貼付隆帯Ｌ押圧による刻目	ナデ	良	円筒上層ａ式
第8図20	遺構外(AB-21)	－	Ⅲ	縄文土器	深鉢･口縁部	折り返し波状口縁、地文ＲＬ	ナデ	良	中期末葉 中の平3式
第8図21	遺構外(AB-24)	－	Ⅱ	縄文土器	深鉢･口縁部	沈線	ナデ	良	中期末葉
第8図22	遺構外(D-15)	－	〃	縄文土器	深鉢･口縁部	折り返し口縁、地文ＲＬ	ナデ	良	中期末葉
第8図23	遺構外(A-19)	－	〃	縄文土器	口縁部	沈線、地文ＬＲ	ナデ	良	中期末葉
第8図24	遺構外(A-21)	－	〃	縄文土器	口縁部	口唇部撚糸圧痕、無文	ナデ	良	中期末葉
第8図25	遺構外(AD-22)	－	Ⅲ	縄文土器	口縁部	口縁平縁、異なる原体を施文	ナデ	良	中期末葉
第8図26	遺構外(AE-16)	－	Ⅱ	縄文土器	口縁部	口縁平縁、沈線	ナデ	良	中期末葉
第8図27	遺構外(AC-25)	－	〃	縄文土器	口縁部	口縁平縁、沈線･磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図28	遺構外(C-15)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図29	遺構外(C-15)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図30	遺構外(AB-24)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図31	遺構外(AB-23)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図32	遺構外(A-24)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図33	遺構外(A-24)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図34	遺構外(A-21)	－	〃	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図35	遺構外(不詳)	－	Ⅲ	縄文土器	胴部	沈線	ナデ	良	後期初頭
第9図11	遺構外(AB-23)	－	〃	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	
第9図12	遺構外(AD-24)	－	Ⅳ	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	
第9図13	遺構外(不詳)	－	Ⅲ	須恵器	胴部	タタキ	タタキ	良	

第６表　出土土製品属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種　別	器種・部位	文　様	内面調整	焼成	備　考
第10図1	SP-04	P-1	1	土器片利用土製品	胴部片を利用	沈線	ナデ	やや良	円形

第７表　出土石器属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種　別	計　測　値				石　質	備　考
					長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)		
第10図2	SK-03	S-1	1	石鏃	53	24	5	6.2	輝緑凝灰岩	
第10図3	SF-01	S-1	pit1覆土上面	石棒	(227)	(31)	(25)	265.5	輝緑凝灰岩	
第10図4	遺構外(AA-24)	－	Ⅱ	石棒破片	(34)	(32)	(13)	19.3	粘板岩	
第10図6	遺構外(AC-22)	－	Ⅲ	敲石･凹石	109	46	36	223.6	安山岩	
第10図5	遺構外(A-23)	－	〃	砥石	81	61	47	274.2	石英安山岩	

第８表　出土鉄製品属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号(第6図関連)	層位	種　別	計　測　値				備　考
					長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	
第10図7	SK-01	F-6(第4図)	5	刀子	137	13	9	16.8	柄木部若干残存
第10図8	SF-01	F-1(第7図)	上面	刀子	47	13	5	4	刀身5分1残存

ま と め

本遺跡の一部は、東北縦貫自動車道八戸線建設事業に先立ち、既に平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施し、平成12年度刊行の『栄山(３)遺跡』青森県埋蔵文化調査報告書第294集として報告されている。本年度の発掘調査は、その調査区に隣接する地区を対象とし、原因者負担区と国庫補助事業区に２分して発掘調査を実施した。本報告書は、そのうちの原因者負担区820㎡の調査結果についてまとめたものである。

本発掘調査では、縄文時代前期から中期、後期初頭、平安時代の土器が出土し、他に石器５点、土製品（土器片利用土製品）１点、鉄製品（刀子）２点などが出土している。

遺物は遺構外からのものが多く、縄文時代前期､中期の土器が若干出土し、中期末から後期初頭の土器がより多く出土している。個々の土器については先に触れているので、ここでは土師器・須恵器の特徴的なことについて簡単に述べることとする。

土師器では量的に少く、甕の口縁部が「く」の字状に外反するものや口縁の幅が短くつまみ出されるものなどがみられる。須恵器では五所川原須恵器窯跡前田野目支群のものが出土しており、須恵器を模倣したと思われる黒色処理した小形壷土師器も出土している。この黒色処理土師器は五所川原須恵器窯跡の生産停止した終末期の様相を示すものと考えられる。以上の特徴は、10世紀後半の土師器・須恵器の標識とされる浪岡町大沼遺跡、源常平遺跡の一部などとも共通するものである。

遺構は平安時代の焼成遺構と考えられる土坑１基（SK-01)、縄文時代の落とし穴と考えられる土坑１基を含む４基の土坑をはじめ、小ピット６基、焼土遺構１基を検出した。

焼成遺構（SK-01）については、青森市朝日山(３)遺跡（青森県教育委員会1995）や野木遺跡（青森市教育委員会1998）で検出されている土坑内の一部が被熱し、炭化物の多い層や焼土などを含む層を有する点など類似している。本遺構は出土遺物から推察すると、10世紀後半の時期に構築・使用されたものと考えられる。

縄文時代の落とし穴については、平成11年度に県で実施した調査区（青森県教育委員会2001）より検出されているが、本調査でも丘陵の縁辺部でほぼ同様の標高約19mの位置に１基検出した。本遺構もまた底面のほぼ中央に打ち込まれた棒杭の痕跡が認められる。

小ピット６基のうちSP-04のみから縄文後期の土器片利用土製品が出土しているが、いずれの小ピットも時期は不明である。

焼土遺構はSF-01の１基であるが、その位置的関係から国庫補助事業区SK-07の土坑に跨る状況で検出されている。焼土中には石英質が多く含まれる土坑や、焼土範囲北側の土坑（SF01-sk01)、南側２基の小ピット（SF01-pit1・2）との関連など総合的な視点からさらに検討することが求められる。

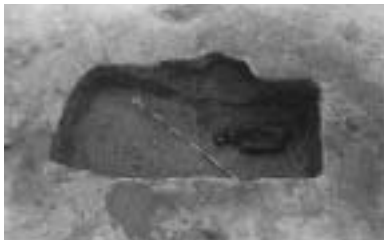
また、平成11年度の県調査分および本年度実施した国庫補助事業区の調査成果を合せてみた場合、本遺跡は遅くとも縄文前期から縄文後期まで断続的に使用され、平安時代には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などから構成される集落が営まれていたことが確認された。以上のことから本遺跡は、南北に延びる丘陵上や、隣接する細越館遺跡の位置する丘陵などに同時期の遺構や遺物が広がる可能性が充分に考えられる。

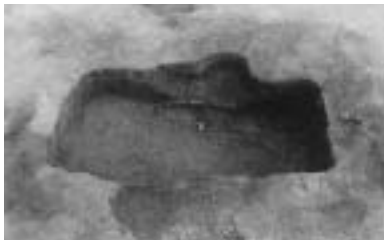
最後に、本報告書を刊行するにあたり、調査委託者である三協運輸株式会社をはじめ、周辺土地所有者や関係機関・諸氏のご指導、ご協力に対しまして深く感謝の意を表する次第であります。

遠　景（N→）

遠　景（E→）

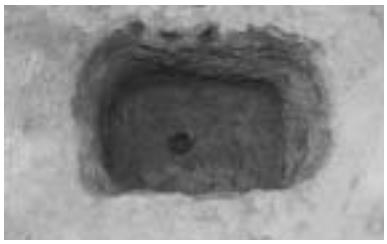
遠　景（W→）


SK-01 焼土検出範囲（NE→）

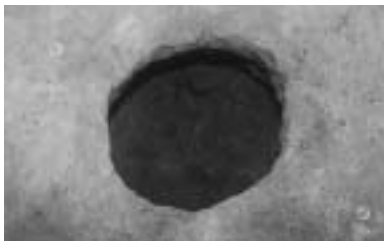

SK-01 完掘（N→）

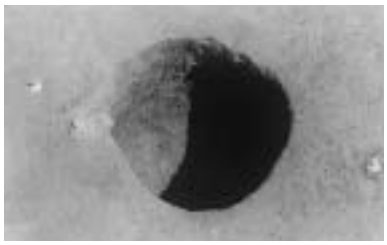
SK-02 完掘（S→）

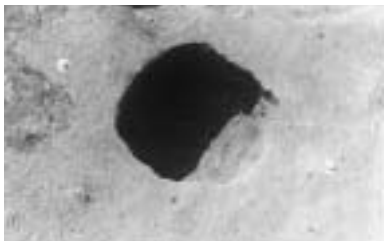
SK-03 完掘（N→）


SK-04 完掘（N→）

左からSP-01～03 完掘（N→）


SP-04 完掘（S→）


SP-05 完掘（S→）

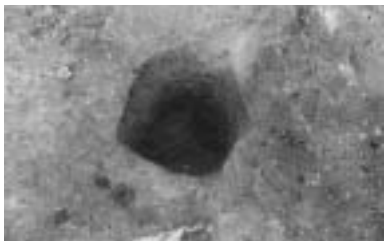

SP-06 完掘（N→）

SF-01 完掘（E→）

SF-01 完掘（W→）

SF01-sk01 完掘（E→）

SF01-pit1 完掘（W→）


SF01-pit2 完掘（W→）

SF-01 石棒（S-1）出土状況（S→）

写真１　検出遺構等

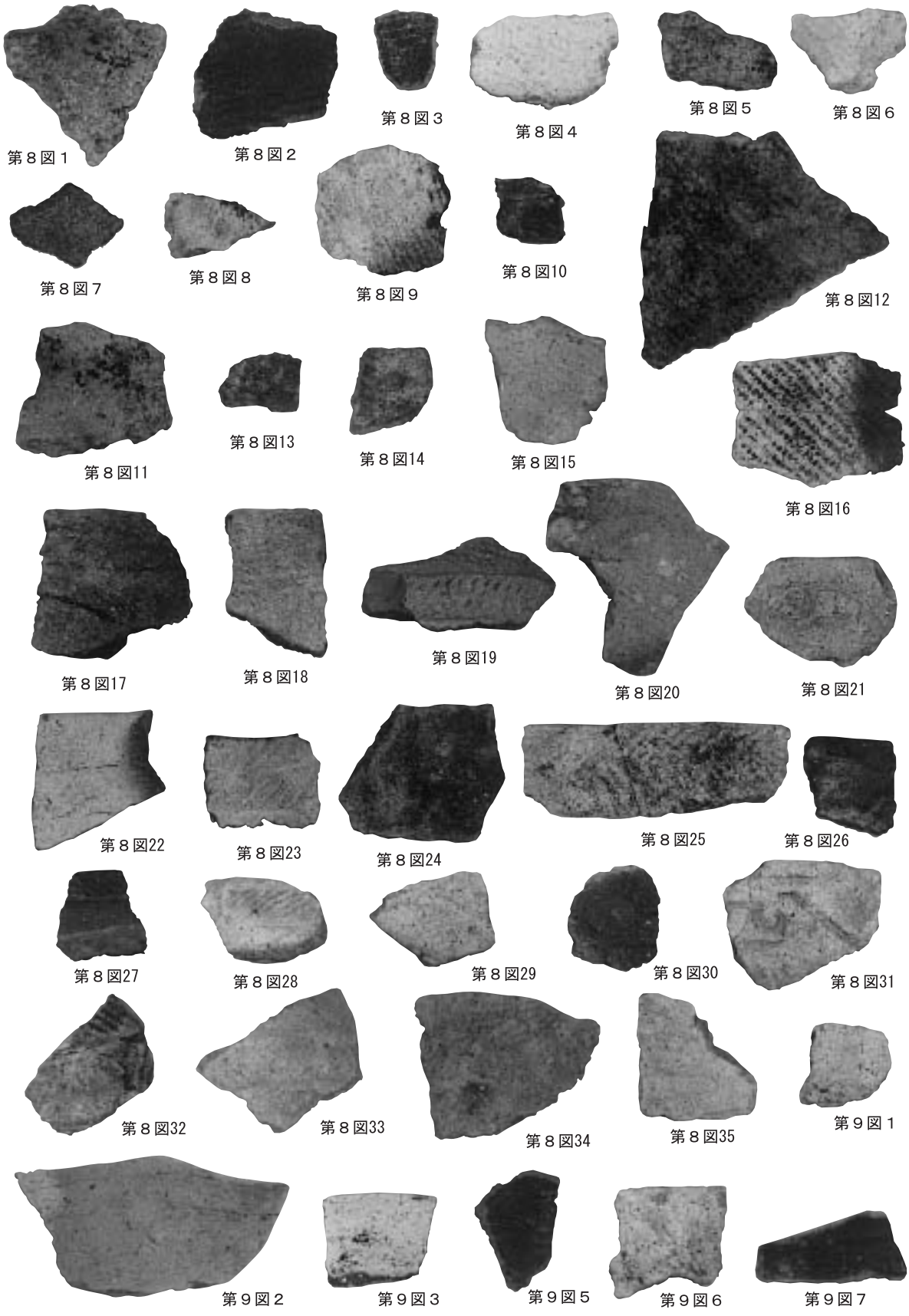

第８図１
第８図２
第８図３
第８図４
第８図５
第８図６
第８図７
第８図８
第８図９
第８図10
第８図12
第８図11
第８図13
第８図14
第８図15
第８図16
第８図17
第８図18
第８図19
第８図20
第８図21
第８図22
第８図23
第８図24
第８図25
第８図26
第８図27
第８図28
第８図29
第８図30
第８図31
第８図32
第８図33
第８図34
第８図35
第９図１
第９図２
第９図３
第９図５
第９図６
第９図７

写真２　出土遺物（１）

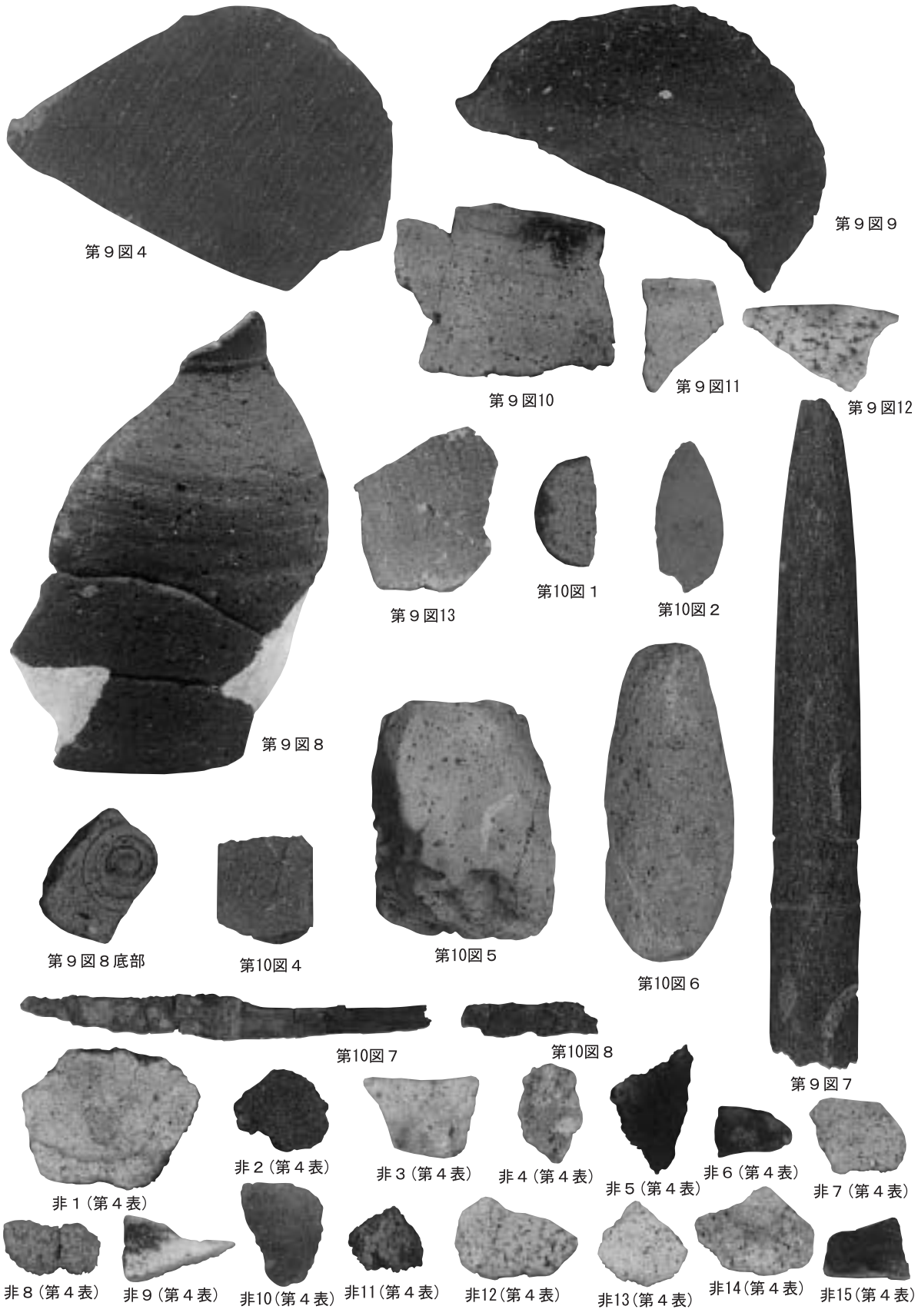

第９図４
第９図９
第９図10
第９図11
第９図12
第９図13
第10図１
第10図２
第９図８
第９図８底部
第10図４
第10図５
第10図６
第９図７
第10図７
第10図８
非１（第４表）
非２（第４表）
非３（第４表）
非４（第４表）
非５（第４表）
非６（第４表）
非７（第４表）
非８（第４表）
非９（第４表）
非10（第４表）
非11（第４表）
非12（第４表）
非13（第４表）
非14（第４表）
非15（第４表）

写真３　出土遺物（２）

報 告 書 抄 録

ふりがな	さかえやま（３）いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	栄山（３）遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第76集
編著者名	一町田工、児玉大成
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555　青森県青森市中央一丁目22－5　TEL017－734－1111
発行年月日	西暦2005年３月８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	日本測地系 (Tokyo Datum) 北緯	日本測地系 (Tokyo Datum) 東経	調査期間	調査面積	調査原因
さかえやま 栄山（３）遺跡	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 ほそごえあざさかえやま 細越字栄山	02201	213	40° 47′ 59″	140° 56′ 49″	20040720 ～ 20040820	820㎡	民間事業（水路付替え工事）に係る事前調査
				世界測地系 2000(JGD2000) 北緯	世界測地系 2000(JGD2000) 東経			
				40° 47′ 49″	140° 57′ 02″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栄山（３）遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑　４基 小ピット　６基 焼土遺構　１基	土器（縄文前期～後期） 土師器（平安時代） 須恵器（平安時代） 土製品（土器片利用土製品） 石器（石鏃・石棒ほか） 鉄製品（刀子）	

引用・参考文献

青森県教育委員会　1976　『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集

青森県教育委員会　1978　『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集

青森県教育委員会　1978　『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集

青森県教育委員会　1989　「中世の城館」『青森市の歴史』

青森県教育委員会　1992　『富ノ沢(２)遺跡Ⅵ富ノ沢(３)』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集

青森県教育委員会　1995　『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集

青森県教育委員会　1995　『朝日山(３)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第167集

青森県教育委員会　1995　『山元(２)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集

青森県教育委員会　1998　『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集

青森県教育委員会　1999　『野木遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第264集

青森県教育委員会　2001ａ『栄山(３)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第294集

青森県教育委員会　2001ｂ『安田(２)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第303集

青森県教育委員会　2003　『野尻(１)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第351集

青森市教育委員会　1998　『野木遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第38集

青森市教育委員会　2002　『大矢沢野田(１)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第61集

青森市教育委員会　2003　『深沢(３)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第67集

大阪府立弥生文化博物館　2004　「三・四世紀の倭人社会」『大和王権と渡来人』平成16年秋季特別展大阪府立弥生文化博物館図録30

工藤 清泰　2004　「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史第１巻』浪岡町

潮見　浩　1988　『図解技術の考古学』　有斐閣

望月 精司　1997　「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

山道 紀郎　1980　「細越館遺跡」『日本城郭大系２　青森・岩手・秋田』新人物往来社

鈴木 克彦　1998　「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』　第３号　青森県埋蔵文化財調査センター

浪岡町　1995　『羽黒平(３)遺跡発掘［試掘］調査報告書』　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第５集

浪岡町教育委員会　1990　『大沼遺跡発掘調査報告書』浪岡町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

成田 滋彦　1994　「青森県の土器」『縄文文化の研究４』雄山閣出版

山内 清男　1979　『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

村越　潔　1974　『円筒土器文化』雄山閣出版

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財１　1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃　2　1965『四ツ石遺跡調査概報』
〃　3　1967『玉清水遺跡調査概報』
〃　4　1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃　5　1971『野木和遺跡調査報告書』
〃　6　1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃　7　1971『大浦遺跡調査報告書』
〃　8　1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
1979『蛍沢遺跡』
1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財　1983『山野峠遺跡』
〃　1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃　1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃　1987『横内城跡発掘調査報告書』
〃　1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書
〃　第16集　1991『山吹(１)遺跡発掘調査報告書』
〃　第17集　1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃　第18集　1993『三内丸山(２)遺跡発掘調査概報』
〃　第19集　1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃　第20集　1993『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃　第21集　1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第22集　1994『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃　第23集　1994『三内丸山(２)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃　第24集　1995『横内遺跡・横内(２)遺跡発掘調査報告書』
〃　第25集　1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第26集　1995『桜峯(２)遺跡発掘調査報告書』
〃　第27集　1996『桜峯(１)遺跡発掘調査概報』
〃　第28集　1996『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃　第29集　1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第30集　1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃　第31集　1997『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第32集　1997『桜峯(１)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃　第33集　1997『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃　第34集　1997『葛野(２)遺跡発掘調査報告書』
〃　第35集　1997『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃　第36集　1998『桜峯(１)遺跡発掘調査報告書』
〃　第37集　1998『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃　第38集　1998『野木遺跡発掘調査報告書』
〃　第39集　1998『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第40集　1998『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃　第41集　1998『野木遺跡発掘調査概報』
〃　第42集　1998『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃　第43集　1999『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　第44集　1999『葛野(２)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃　第45集　1999『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃　第46集　1999『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃　第47集　1999『稲山遺跡発掘調査概報』
〃　第48集　2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃　第49集　2000『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃　第50集　2000『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃　第51集　2000『桜峯(１)・雲谷山吹(３)遺跡発掘調査報告書』
〃　第52集　2000『大矢沢野田(１)遺跡調査報告書』
〃　第53集　2000『市内遺跡発掘調査報告書』
〃　第54集　2001『新町野遺跡発掘調査報告書・Ⅱ野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃　第55集　2001『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃　第56集　2001『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃　第57集　2001『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃　第58集　2001『大矢沢野田(１)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃　第59集　2001『市内遺跡発掘調査報告書』
〃　第60集　2002『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃　第61集　2002『大矢沢野田(１)遺跡発掘調査報告書』
〃　第62集　2002『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃　第63集　2002『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
〃　第64集　2002『市内遺跡発掘調査報告書』
〃　第65集　2003『雲谷山吹(４)～(７)遺跡発掘調査報告書』
〃　第66集　2003『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃　第67集　2003『深沢(３)遺跡発掘調査報告書』
〃　第68集　2003『近野遺跡発掘調査報告書』
〃　第69集　2003『市内遺跡発掘調査報告書11』
〃　第70集　2003『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃　第71集　2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃　第72集　2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃　第73集　2004『新町野遺跡発掘調査概報』
〃　第74集　2004『市内遺跡発掘調査報告書12』
〃　第75集　2004『江渡遺跡発掘調査報告書』
〃　第76集　2005『栄山(３)遺跡発掘調査報告書』
〃　第77集　2005『赤坂遺跡発掘調査報告書』
〃　第78集　2005『三内丸山(８)遺跡発掘調査報告書』
〃　第79集　2005『市内遺跡発掘調査報告書13』
〃　第80集　2005『合子沢松森(２)遺跡発掘調査概報』
〃　第81集　2005『石江遺跡群発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第76集

栄山(3)遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成17年3月8日
発　行　青森市教育委員会
〒030-8555 青森市中央一丁目22-5
TEL 017-734-1111
印　刷　青森コロニー印刷
〒030-0943 青森市幸畑字松元62-3
TEL 017-738-2021